

# 事件

2005(平成17)年12月25日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

★★★★



監督=野村芳太郎/原作=大岡昇平/出演=松坂慶子/永島敏行/大竹しのぶ/渡瀬恒彦/  
芦田伸介/丹波哲郎/山本圭(松竹配給/1978年日本映画/138分)

……大岡昇平原作の骨太ドラマを見事に映画化。松坂慶子、大竹しのぶ姉妹の熱演とすつとぼけた味のヤクザを演ずる渡瀬恒彦が印象的。検事・弁護士は芦田伸介、丹波哲郎と少し重厚すぎる感もあるが、手を抜かず(?)互いに職務熱心な姿は大いに見習わなければ……。『殺意』の立証が難しいのは当然で、それをめぐる小説や映画は多い。しかし、この映画が描く本格的法廷シーンは法科大学院の教材として、また裁判員制度普及の教材としてピカ一。

## 当時としては珍しい本格的法廷ドラマ

2009年5月の裁判員制度の施行を控えて、法曹界は今総力をあげてそのキャンペーンに努めているが、さてその行方は? 実のところ、私はその施行をかなり心配しており、下手をすれば「準備不足により延期」という事態になる可能性もあるのではと考えている。アメリカではジョン・グリシャム原作のリーガルサスペンスをはじめとして、法廷ドラマは映画の1つのジャンルとして確立しているが、裁判になじみの薄い日本では到底そこまではいかない。もっとも、安易な(?) テレビドラマとしての弁護士モノは結構人気があり、古くは賀来千香子らの『七人の女弁護士』や『九門法律相談所』『女弁護士高林鮎子』など、そして最近では天海祐希の『離婚弁護士』などいろいろある。しかし1970年代はそうもいかず、本格的な法廷ドラマは少なかった。そんな中、大岡昇平原作の『事件』は、当時としては珍しく本格的な法廷ドラマ。法廷での検事と弁護士の息づまる闘いと、それを観客に理解させるために回想シーンをバランスよく配置したこの映画は、今でも法科大学院における教材としてもピッタリの本格的法廷ドラマ。

## 被害者は誰、そして逮捕されたのは？

この『事件』は、神奈川県相模川沿いにある土田町の山林で起こった若い女性の刺殺事件。被害者の坂井ハツ子（松坂慶子）はこの町出身で、新宿でホステスをしていたが、1年程前から厚木の駅前でスナックを営んでいた女性。

他方、この殺人事件、死体遺棄事件の被疑者として逮捕されたのは、19歳の造船所工具上田宏（永島敏行）。宏はハツ子が殺害された日の夕刻、ハツ子を自転車に乗せて現場付近の山道を走っている姿を目撃されていた。果たして、宏はホントに登山ナイフでハツ子の腹部を刺して殺害し、その死体を遺棄したのだろうか？ そして法廷はどのようにしてその真相に迫ることができるのだろうか？

## 2人の重要な登場人物

この映画には、宏とハツ子以外にも2人の重要な人物が登場する。その1人は、ハツ子の妹のヨシ子（大竹しのぶ）。ヨシ子は宏と恋仲で、今妊娠3カ月の状態。2人はまだ19歳ながら子供を産み、20歳になれば結婚しようと考えていたが、さて姉のハツ子はこの2人をどのように見ていたのだろうか……？ この当時から大竹しのぶの芸達者ぶりが目立っていることに新鮮な驚きが……。もう1人は、ヤクザでハツ子のヒモ同然となっている宮内辰造（渡瀬恒彦）。宮内の生き方や人生観はそれなりに興味深いもの（？）だが、法廷における彼の証言によって、検察官も弁護人もさらには裁判所も大きく振り回されることに……。

## 芦田伸介検事 VS 丹波哲郎弁護士の対決は……？

この事件を審理する裁判長は、野村芳太郎監督のもう1つの本格的法廷ドラマ『疑惑』（82年）でも裁判長役を務めた佐分利信。手際よく審理を進めていくその姿は、ホンモノの裁判長以上……。他方、法廷ドラマとしての迫真性を強調するためか、野村芳太郎監督は、検察官役には芦田伸介、弁護人には丹波哲郎とそれぞれ重厚な役者を配置した。『疑惑』でも丹波哲郎は東京の優秀な刑事弁護士という役柄で少し登場する。しかし、『疑惑』では彼は白河球磨子の弁護を断ったため、国選で岩下志麻演ずる弁護士が登場することになり、岩下志麻と球磨子

演ずる桃井かおりとの「掛け合い」を最大の見どころとしたのは、さすが……？

検察官の持つ風呂敷や手書きらしい縦書きの書類の山は、いかにも1970年代当時の刑事法廷を彷彿させるもの……。また起訴状朗読、冒頭陳述、証人尋問、論告、弁論という刑事裁判の一連の流れも、この映画を観れば概ね理解できるはず。証人尋問の成否やそのテクニックまで理解するのは難しいだろうが、熟練の弁護士の意見を聞きながらこれを観れば、十分法科大学院の教材になりうるはず……。

## ■ 事件の争点は？

検察側は宏を殺人罪、死体遺棄罪で起訴したが、弁護人は死体遺棄は認めたものの、殺人は否認し、せいぜい傷害致死罪か過失致死罪だと主張したため、審理はその争点をめぐるものに。そのポイントは、殺人の故意（殺意）の有無。宏はなぜ登山ナイフを購入したのか？ そして山中でなぜハッ子を前にしてそれを取り出したのか？ そして……？ この争点をめぐる検察側、弁護側の秘術を尽くした攻防戦は、宮内とヨシ子の証人尋問を中心に展開されたが……？

## ■ 役者やのう……

この映画の「謎解き」を面白くしているのは、何といたってもヤクザの宮内。最初は「検察側の証人」として、いかにも宏に殺人の動機があるかのように証言していたが、弁護側からの厳しい反対尋問の前に時々ボロを……。しかも菊地弁護士は、宏の学校時代を知っている花井先生（山本圭）をうまく「私設探偵」として使って結構重宝なネタを収集。こりゃ弁護士としても十分見習わなければ……。

面白いのはその後の宮内証人の証言。現実の裁判では、いったん尋問を終了した証人が再度申請、採用されることはほとんどないが、宮内に限ってはコトが重大なだけに2度目の証人尋問が実施された。さらに宮内が殺害現場を目撃していたと証言したため、殺人現場を含む現場検証の手続を実施することに……。現場検証は、3人の裁判官と書記官、そして検察官と弁護人を中心としてたくさんの人間が現場へ赴く大変な手続だが、その手続のやり方もこの映画を観れば十分理解できるから、法科大学院の教材としてもきわめて有益……。それにしても渡瀬恒彦が演ずるヤクザの宮内は、役者やのう……。 2006(平成18)年1月10日記